2022年10月2日（日）主日朝礼拝説教

『礼服を着ない人』　井上隆晶牧師
サムエル記下11章1～5節、マタイ福音書22章8～14節

❶【なぜ、ダビデは大罪を犯したのか】
今日のお話はダビデが自分の家臣の妻と姦淫した話です。彼の生涯の汚点であり、ここから彼の人生は崩れて行ってしまいます。ダビデは自分の部下たちが戦場に出かけているのに、自分だけは安全な王宮にいて昼寝をしていました。聖書にこう書いてあります。「**ある日の夕暮れにダビデは午睡から起きて、王宮の屋上を散歩していた。彼は屋上から、一人の女が水を浴びているのを目に留めた。女は大層美しかった。**」（サムエル下 11：2）彼女はウリヤの妻バト・シェバでした。ダビデは彼女を召し入れ関係を持ちます。彼女が子を宿すと、夫ウリヤを戦場から連れ戻し、家に帰るようにいうのですが、彼は皆が野宿しているのに自分だけ帰るわけにはいかないと言って帰ろうとしません。そこで前線に送り返して、彼をわざと戦死させました。そしてダビデは部下の妻を自分の妻にしてしまうのです。「**ダビデのしたことは主の御心に適わなかった**」（同11：27）と書かれています。口語訳だと「**ダビデがしたこの事は主を怒らせた**」となり、もっと厳しい言葉になっています。私たちもこの話を読む時、「これはひどい話だ」と憤りを覚えると思います。でもダビデだけが罪深いのでしょうか？
フランスのラ・ロシュフコーは「われわれがいろいろな情念に負けないのは、たまたまそれらが弱いからであって、われわれが強いからではない」と言っています。犯罪者の生い立ちを聞くと、機能不全家庭であったり、愛してくれる人がいなかったり、非常に悪い条件の中で育った人が多いのです。**私たちがダビデのような忌まわしい事件がないとすれば、それは私たちが強いからではなく、私たちが守られていたからなのかもしれないのです。**主は、私たちに「**私たちを誘惑に陥らせず、悪からお救いください**」と祈りなさいと教えられました。何気なく祈っていたと思いますが、私たちは自分が弱い者であることを知り、謙虚な気持ちになって祈らなければならないと思います。
もう一つ気になることがあります。あれほどサウルに命を狙われても彼に復讐せず、いつも自分の心をコントロールできていたダビデが、ここでは完全に自分の心の欲望を抑えることができませんでした。なぜでしょうか？それはダビデの周りの敵がほとんどいなくなったことと関係していると思います。修道士は「暇になると悪魔が入る」と言っています。暇だと人間はろくなことを考えません。私たちの人生からさまざまな問題がなくならないのは、神があえてそうなさっているのです。問題があれば心は緊張し、神様を必死に求めます。問題がなくなれば人は神を求めなくなるのです。旧約聖書で、イスラエルの民が約束の地に入った時、神様は原住民をすべて追い出しませんでした。その理由として「**獣が増えて地が**

荒れるから」と書かれています。私たちは信仰の戦いをやめてはいけないのだと思います。敵は外だけでなく、内にもいます。私たちがいくら外の敵を支配したとしても、私たちの心の中の敵を支配することを忘れてはなりません。そちらの方が難しいのです。

❷【罪の恐ろしさ】

ダビデは自分の罪を隠し通したと思っていましたが、神はすべてを見ておられ、預言者ナタンを遣わしてダビデの罪を暴きました。「**なぜ、主の言葉を侮り、私の意に背くことをしたのか。…それゆえ、剣はとこしえにあなたの家から去らないであろう。…わたしはあなたの家の者の中からあなたに対して悪を働く者を起こそう。**」（サムエル下 12：9、10、11）**罪の恐ろしさは、自分だけではなく、自分の周りの人を巻き込み、破壊してゆくことにあります。家族を破壊し、社会を破壊し、神との関係を破壊してゆきます。必ず、自分の周りの人を巻き込んでゆくのです。**プーチンの罪によって、ウクライナの国は苦しみ、EU も苦しみ、世界の貿易に影響は及び、穀物が輸出されないことによって、アフリカの多くの国の貧しい人たちが餓死しています。ダビデの家庭もそうです。13 章以下を読むと、ダビデの子供たちが問題を次々と起こしてゆきます。ダビデの息子のアムノンが妹のタマルを辱め、床を共にします。妹が辱められたことを知った兄のアブサロムが、今度は弟アムノンを殺します。そしてそのアブサロムが父ダビデに謀反を起こし、父をエルサレムから追放し、親子で戦争になります。兄弟殺し、近親相姦、親子の対立、すべてが壊れてゆきます。それがもう裁きになっています。この忌まわしい堕落の物語の中で、神は登場してきません。誰も悔い改めず、誰も神に祈りません。**ダビデがその生涯で行ったたくさんの善い業を一瞬のうちに破壊するのが罪なのです。ダビデだけではありません。これは私たちに対する警告なのです。**

❸【神に帰ることができる恵み】

ダビデは姦淫と殺人という二つの大罪を犯しました。律法によれば死罪です。サウル王でさえそのような大罪を犯したことがありません。それなのにサウルは王位を取り上げられ、ダビデは取り上げられませんでした。なぜでしょうか？それは彼が神に立ち帰り、悔い改めたからです。預言者ナタンの叱責を聞いてダビデは「**私は主に罪を犯した**」（サムエル下 12：13）と罪を認めました。するとナタンは「**その主があなたの罪を取り除かれる。**」（サムエル下 12：13）と言いました。**人は罪を犯し、どんどん堕落してゆきます。それを止めることが出来るのは人間ではなく、神だけなのです。**神は悔い改める者を受け入れ、赦して下さいます。イエス様も「悔い改めます、と言って帰ってきたら限りなく赦せ」と言われました。「悔い改め」は神の恵みなのです。

悔い改めとは、立派な人になる事、悪いことをしない人になることではありません。それは人間には不可能です。人は死ぬまで罪を犯し続けます。悔い改めとは、自分の罪を認めて告白することと、神に帰り、神によって生きることです。皆さんも「自分の罪を認めている」者に対して腹は立ちますか？立たないと思います。私たちが腹が立つのは、自分は悪くないと言い張る人、人のせいにする人、罪の言い訳をする人、開き直る人です。自分の弱さを認め、一生懸命正しく生きようとする人を誰も裁くことは出来ません。

●昔この教会ではＡＡのミーティングをしていました。アルコール依存症のクリスチャンが、善いクリスチャンになるために作った「１２ステップ」というのがあります。それが全世界に広まってあらゆる依存症の自助グループに用いられるようになりました。その１２ステップの第一は「私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。」第二は「自分を超えた大きな力（神）が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。」です。彼らは悔い改めの模範です。自分の罪を認め、治すために努力をしているからです。

私たちの救いは、帰るところがあるということです。それは教会です。教会に帰ればそこに完全な赦しと、愛と、命が待っています。つまりキリストがおられます。この主に帰りなさい。この世では自分の罪を告白したくても出来ない、赦しが聞きたくても聞けない人が大勢いるのです。誰に告白したらいいのか多くの人は知りません。仕方がないので死が臨むと看護師や医者に告白するのです。でも皆さんは幸いです。帰る場所があり、帰るべき方を知っているからです。

今日の福音書は天国のたとえ話を読みました。天国に「善人も悪人も連れてきた」と書かれています。天国に入るのに悪人であることは問題ないのです。入り口で「礼服」を渡されましたが、それを着ない人がいたというのです。そこで彼は天国の外に追い出されてしまいました。悪人が追い出されたのではなく、礼服を着ない人が追い出されたのです。この礼服とはキリストの事です。洗礼を受けると私たちはキリストという衣を着るのです。「**洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。**」（ガラテヤ ３：27）衣とはその人を覆うものです。寒さ暑さ、恥から覆います。キリストが私たちを覆ってくれるのです。自分は自分の立派さで神の前に立てれると思う人はキリストを必要としないのです。この礼服を脱いだ人は、律法学者やファリサイ人のように自信満々の人だったかもしれませんね。

●昔、東梅田教会の信徒さんで「Ｉさん」という人がいました。彼は東京深川生まれで、流浪の生活を長くしていましたが、大阪に流れ着き生活保護を受けて生活していました。教会の近くに住んでいたのでよくやって来られました。彼は私に「キリスト無しで神の前には出れねえ。そんな恐ろしいことは俺にはできねえ。」とよく言っ

ていました。彼の立派な信仰告白だと思います。

キリストの元に帰るのに手遅れということはありません。十字架の強盗は死の間際にキリストのもとに帰り、「天国」を約束されました。夕方5時から、ぶどう園に帰ってきた人も、同じ賃金をもらったのです。神の赦しは誰にでも同じように与えられます。キリストに触れられた時、私たちは落ちるのが止まるのです。罪を止め、死を止めて下さるのがキリストです。「**その主があなたの罪を取り除かれる。**」というナタンの言葉に感謝しましょう。そして常に、主の家に帰って来る者となりましょう。